

大阪府保育士会だより

平成21年9月1日

第82号

大阪府社会福祉協議会

保育部会・保育士会

大阪市中央区中寺1-1-54

TEL 06-6762-9001

# ほほえみ

## 母親参加型の “にこにこ広場”



当園では、ここ十年来、就学前児を対象に園庭開放を実施、にこにこ広場”になっていきます。子ども同士の関わり合いや親のみなさん、保育士たちとの信頼関係を深めながら、いい交流を持つことができていると思います。

母親参加型で、全員の前で意見を述べたり、絵本の読み聞かせをしたり、夕涼み会などにも参加してもらっています。

この活動を通じ、地域全体の保護者のみなさんの育児の手助けができればと取り組んでいます。

岸和田市 山直南保育園

## 行事体験やマタニティー相談も



歩道から全面芝の園庭や園舎を見渡せ、地域の方々に訪ねてもらいやすい空間を提供しています。夏、冬の夜にはイルミネーションを点灯させ、地域の方々に喜んでいただいています。

園庭開放や運動会などへの行事体験を実施しているほか、育児、マタニティー相談を保育士・看護師が随時行っています。今年度からは卒園児が毎日放課後に帰ってくるようになりました。これからも世代を問わず、地域と共に歩める保育園でありたいと思います。

守口市 橋波保育園

地域ととも  
びれあい大切に

マリア保育園は平成16年に八尾市若林町に開園しました。近くには八尾空港があります。

春には桜の花の下で食事会をしたり、子どもたちの年齢に応じて距離を選べる公園があり、散歩を兼ねた園外活動も豊富にできます。花摘み、虫取りなど自然に触れながら、子どもたちは四季を通じ存分に体を動かし楽しんでいきます。

そのような環境の中で、昨年からは子育て支援活動として、毎週火・水・木曜日、在宅中の親子（年齢ごと）に、保育園生活の一端を経験してもらっています。

子どもたちが名前を呼ばれて返事をする、トイレに行く、手を洗う、みんなと遊んだり製作などに取り組む、といったことが保護者には新鮮に受け止められているようです。

一人ひとりの子どもが落ち着きを保ち、ルールがわかり、「皆と一緒に」「皆の中で」という姿を目にすることは保護者にとっては何れも嬉しい場面となっています。

運動会・夏の行事・クリスマス会などに参加していただき好評でした。講師を招いて、わらべ歌遊び・運動遊び「キッズいわき・ぱふ」の岩城敏之先生のおもちゃを使った遊びなども取り入れていきます。

今夏は野菜作りに挑戦しました。いつでもどこでもできる土いじりが、親子で育てる野菜作り、収穫の楽しさへと変わっています。

## 在宅親子に保育園体験 新鮮な活動の場に

子育て支援シリーズ⑭



子どもたちが名前を呼ばれて返事をする、トイレに行く、手を洗う、みんなと遊んだり製作などに取り組む、といったことが保護者には新鮮に受け止められているようです。

一人ひとりの子どもが落ち着きを保ち、ルールがわかり、「皆と一緒に」「皆の中で」という姿を目にすることは保護者にとっては何れも嬉しい場面となっています。

運動会・夏の行事・クリスマス会などに参加していただき好評でした。講師を招いて、わらべ歌遊び・運動遊び「キッズいわき・ぱふ」の岩城敏之先生のおもちゃを使った遊びなども取り入れていきます。

今夏は野菜作りに挑戦しました。いつでもどこでもできる土いじりが、親子で育てる野菜作り、収穫の楽しさへと変わっています。

八尾市 マリア保育園

# 子育て支援の拠点・保育所の機能を考える

## 高屋保育園の山本佳代さんが発表

### 21年度近畿ブロック保育研究集会



ども基金」など保育行政の動向について報告され、引き続き7つの分科会で研究発表が行なわれました。

大阪府からは第4分科会「子育て支援の拠点としての保育所の機能を考える」高屋保育園（柏原市）の山本佳代氏が発表。脳の活性化に良い効果のある午後の園庭開放、在園児と共に活動する園舎開放、講師の先



21年度近畿ブロック保育研究集会が7月16・17日の両日「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」をテーマに、神戸市の神戸ポートピアホテルで開催されました。

初日は、厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長補佐の杉原広高氏が「新待機児童ゼロ作戦」「安心こ

生から指導を受けるリズムや英語の親子教室などの子育て支援をされています。

より多くの人に参加してもらえよう日程を調整したり、参加者カードを作成し個人を把握できるように改善されました。地域のネットワークづくりの中心として保育所の役割がある、と職員の理解のもとに取り

組みをすすめていると述べられました。

続いて壬生保育所（京都市）の福岡淳子氏はパパママ子育てふれあい体験、子育て講座、ヨガ講座などについて発表されました。

助言者の神戸常盤大学の小崎恭弘准教授は、子育て支援の社会的要請が増し、地域のなかで子育て文化を



保育所がいかに作っていくかが大事、と締めくくられました。

2日目は明星大学教授の高橋史朗氏が「子どもと親、共に育つ保育所づくり」をテーマに記念講演。

高橋氏はそのなかで、モンスターペアレントや学級崩壊の原因はどこにあるのかについて、親や家庭力の

園長、主任、リーダーを対象とした平成21年度「保育士の専門性を高める連続研修会」が7月30日と8月3日、6日の3日間、大阪社会福祉指導センターで開催され、127名が参加しました。

第1日目は、大阪教育大学の玉置哲淳教授が「改定保育所保育指針と人権保育の進め方」、大阪府立大学の里見恵子准教授が「真の統合保育を目指して―障がい児、発達障害のある子どもへの具体的な援助を考える―」のテーマでそれぞれ講義されました。

り「ヒト」として子どもを尊敬する保育の創造には、人権理解と尊敬・公平・反偏見の3つの課題が必要であることや、またいろいろな障がいのある子どもが増えている中、保育現場での具体的な言葉かけや環境づくりなどを学びました。

第2日目は、オフィスフロレンズ代表の藤島久美子氏が「とっさの時も美しい、上手な話し方とふるまい」、大阪府福祉部子ども室子育て支援課の余田俊和課長補佐が「新しい保育制度の動向について」をテーマに講義されました。

方、話し方などリラックスした雰囲気の中で講義を受け、続いて大阪府より現在の情勢について報告されました。

最終日は、神戸松蔭女子学院大学の寺見陽子教授が「保育課程について」、大阪総合保育大学の大方美香教

授が「保育所保育指針と実践を繋げる」のテーマで講義。

保育指針と実際の保育をいかに繋げていくかが最重要であるということ、そのために就学までの子どもには先送りしてはならない発達課題があり、積木を積むように保育を行うことが大切であると話されました。

保育士の専門性が求められる今、よいタイミングで受講し学ぶことができ充実した3日間でした。

東大阪市  
本庄保育園



## 人権理解と尊敬・公平・反偏見が課題 園長・主任・リーダー対象の「専門性を高める連続研修会」





# 小学校との「段差」なくす保幼小の連携必要 パートナーシップのツールとなる個別計画

— 中堅保育士研修会 —



## 保育士の学びシリーズ ⑬

### 保護者支援とは

大阪府立大学 里見恵子氏



中堅保育士研修会が6月30日、181名が参加し大阪社会福祉指導センター5階ホールで行われました。

最初に、常任委員の山本佳世先生から、近畿ブロック保育研究会での発表を前に担当する分科会「子育て支援の拠点としての保育所の機能を考える」(2面参照)について説明されました。

続いて、大西潤子会長から「質を高める個別計画」



神戸親和女子大学 新保真紀子氏

の意義と重要性、また個別計画の様式の説明及びアセスメントの手法と具体的な記入法について解説がありました。

この個別計画は、一人ひとりの

発育過程を踏まえながら子どもと親のニーズを把握できるように、保育園と家庭がそれぞれに持っている情報を出しあい、一緒に考えるパートナーシップを築くためのツールとなり、質の高い保育の基盤となるものとわかりました。

最後に神戸親和女子大学准教授の新保真紀子氏が「人権保育の今、ここから豊かな保幼小連携を目指して」をテーマに講義。

主に「小1プロブレム」について述べられました。「小1プロブレム」とは、学級の遊びと学びと暮らしが機能不全になっている集団未形成の問題ですが、その背景にあるものとして、子どもの育ちの変化▽子育ての変化と孤立▽子どもや親の自尊感情▽自己完結した保幼小▽就学前教育と学校教育の段差▽旧来の学校教育と子どものミスマッチなどを挙げられました。

特に小学校と保育所との段差(違い)については印象深く感じられました。段差を超える喜びは大きなものがありますが、互いに補助段階を出すことでスムーズに段差を超えられるのではないかと述べられました。その段差をなくすため、また、子どもたちの遊びや学びのためにも保幼小の連携の必要性を強く実感させられました。東大阪市 たいよう保育園

第1回は保護者の障害の受容のプロセス、第2回は障害を受容している保護者への支援、

第3回では障害受容ができない保護者への支援を考える。

ドクターたちは障害受容のプロセスを5段階モデルで説明している。第1段階は障害を知ったときのショック、続く第2段階は否認、子どもに障害があるという事実を認められず、「そんなことはあり得ない」と否認しようとする。第3段階は悲しみと怒りの段階で「なぜ自分の子に障害があるのか」と理不尽な運命に

悲観したり絶望を感じたりする。この段階を経て第4段階の適応に至る。徐々に現実を受け入れ、生活や育児にも落ち着きが出てくる。最後の第5段階は再起であり、子どもをしつかり受け入れいろいろな問題に対処できるようにするとされている。

保護者支援のためには、保護者が今、障害受容のどの段階にいるのかを知り支援を行うことが求められる。まだ障害に気がついていない

いのか、障害を告知されたものの、悲嘆に浸っているのか、ある程度受け入れられているのかなどを知ることが始まる。例えば、子どもを保育所に連れてくるなり、置いて逃げ帰るような保護者では、何も言われたくないという心のサインであり、第2段階または第3段階にあるだろう。このような保護者には、認めたくない気持ちに寄り添うことから始めることが求められる。

一方、保育所や担任に障

害についてしつかり説明できる保護者は障害受容ができており、積極的な支援を園や保育士に求めてきている。

子どもへの具体的支援のためにと、保育所が保護者の障害受容を急ぐことがあるが、急ぐことで保護者との関係が悪くなる例も多い。保護者の障害受容までのプロセスを理解し、保護者の今の心の状態に合わせて支援することが保護者支援の第一歩であるだろう。

# 保育 あんな工夫 こんな工夫

## ★毎朝のマラソンや雑巾がけで

### 体力づくり



鉄棒での腕立て懸垂や腕立て伏せで自分の体が支えられない5歳児。転んだ時に手が出ず、顔に怪我をする子が続出、びつくりしヨックを受けたものです。

そこで取り組んだのが、3歳児以上は毎朝のマラソンとかけっこ、2歳児は雑巾がけ、0歳児からのリズム運動です。走る・蹴る・跳ぶ・這うなどの動作で手足の力をつけ、散歩なども多く取り入れ体力増進を図りました。

「継続は力なり」—今では怪我も少なくなり、登り棒をスルスルと登ったり、鉄棒・雲梯・縄跳びで「みて！みて！」と子どもたちの声。その表情は笑顔で自信に満ち、キラキラと輝いています。また、子どもたちの行動にメリハリがあり、活動の切り替えが早くなったように思います。そんな子どもたちの成長に感動す



堺市 ひなぎく保育園

ることしばしばです。

食事の面では、噛む力をつけるために、白米を5分づき、野菜は少し大きく硬めにし、歯ごたえのある食事を。おやつは皮付きりんごやトウモロコシ、煮ごぼろなどを提供しています。

今、子どもたちにとって何が必要なのかを見きわめ、子どものために良いと思うことは積極的に取り入れています。子どもも保育士も愛情と信頼をもって楽しく充実した園生活を送っています。

3歳児は「竹ぼっくり」、4歳児は「天狗げた」、5歳になったら「竹馬」と、年齢に応じた取りくみをしています。

前年の活動を見てきた子どもたちは、4月になると「やりたーい！」とあそびの中でそれぞれが思い



## 楽しい保育活動 あきらめないでチャレンジ! 天狗げた、竹馬……

れたりを繰り返しながら、少しずつ高くしていきます。クラス担任だけでなく、たくさん先生の教えてもらって何度も



な体で縄のタイミングを取って飛び込んでくる姿に縄を握る手に思わず力が入ります。秋の親子で運動あそびを楽しむ「エンジヨイデー」では、みんなががんばってできるようになった活動を見ていただき、共に成長を喜ぶ日としています。

チャレンジ。歩けない、乗れないとあきらめてしまう気持ち、ハネ返し、少しでも進歩すると、飛んで来て報告。「先生、見て！できた」と誇らしげな声が響くと、周りのみんなから大歓声です。もう一つの取りくみの長縄跳びでは、3歳児は回っている縄をくぐり抜ける、4歳児は静止の状態から3回跳ぶ、5歳児は走って入って3回跳んで走って出る課題にしています。小さな



長かった梅雨があけたかと思うとすぐ台風が上陸し大きな爪痕を残しました。被害にあわれた皆様のことを思いますと本当の心が痛みます。夏が終る頃には子どもたちから楽しかった思い出話をいっぱい聞くことができみんな笑顔がずっと続くことを願いたいものです。

各保育園におかれま

キしながら「山の音楽家」の子リスになった子どもたちでした。

摂津市 せつつ保育園  
第3回食育フェスタ

8月25日(火)に  
そごうで開催  
されました。



### 編集後記



しても秋には行事が盛りだくさん予定されていることでしょう。大変忙しくなりそうです。大変忙しくなりそうです。大変忙しくなりそうです。

